

大津皇子「臨終一絶」をめぐる諸問題

金 文京

京都大学人文科学研究所 教授

(1) 大津皇子「臨終一絶」と中・韓の臨刑詩

日本最古の漢詩集である『懐風藻』(751年成立)に見える大津皇子の「臨終一絶」詩と同じ内容で、かつ表現もきわめて類似した詩が、中国および韓国の長い時期にわたる複数の人物の臨刑詩として伝わっていることは、比較文学史上また東アジア漢字文化圏における文化交流を考える上で、まことに興味深い問題であると言わねばならない。この問題に関しては、すでに小島憲之、濱正博司両氏の論考が備わり、筆者もかつて論じたことがあるが、ここでは新たな資料をも加えて、この一群の詩の性格と由来について、再度考察してみたい。まずは関連する詩群を発表年代順に列挙して示す。

- 1 大津皇子(663 - 686)「臨終一絶」(『懐風藻』751) 金烏臨西舍, 鼓声催短命。泉路無賓主, 此夕誰(一に離に作る)家向。
- 2 陳後主(553 - 604)詩(日本・智光『浄名玄論略述』『日本大蔵経』方等部章疏5 750頃) 鼓声推(催)命役(短?), 日光向西斜。黄泉無客主, 今夜向誰家。
- 3 江為「臨刑詩」(『五代史補』1012『全唐詩』卷741) 衙鼓侵人急, 西傾日欲斜。黄泉無旅店, 今夜宿誰家。
- 4 元雜劇「薛仁貴衣錦還郷」四折「豆葉黄」曲(『元刊雜劇三十種』14世紀後半) 黄泉無旅店家, 晚天今夜宿在誰家。
- 5 宋代南戲「小孫屠」第19齣 (『永樂大典』卷13991 15世紀初) 黄泉無旅店, 今夜宿誰家。

- 6 孫蕢(? - 1393)「臨刑詩」(『西庵集』15世紀初) 鼙鼓三声急, 西山日又斜。黄泉無旅舍, 今夜宿誰家。
- 7 朝鮮・成三問(1418 - 56)「臨刑詩」(『稗官雜記』1538) 擊鼓催人命, 回看日欲斜。黄泉無一店, 今夜宿誰家。
- 8 『水滸伝』第8回(17世紀前半) 万里黄泉無旅舍, 三魂今夜宿誰家。
- 9 葉德輝(1864 - 1927)「臨刑詩」(周作人『苦竹雜記』1936) 慢擂三通鼓, 西望夕陽斜。黄泉無客店, 今夜宿誰家。
- 10 金聖歎(1607 - 1661)「臨刑詩」(伍俶「日本之漢詩」『中日文化論集』1955) 御鼓丁東急, 西山日又斜。黄泉無客舍, 今夜宿誰家。
- 11 戴名世(1653 - 1713)「臨刑詩」(『安徽歷史上科学技術創造發明家小伝』1959) 戰鼓冬冬響, 西山日已斜。黄泉無客舍, 今夜宿誰家。

以上の諸作, 1のみ叙述の順序が異なるが、内容は同じ, 2以下は字句にやや異同があるだけで基本的に同じ詩であることは明らかであり、偶然の一致とは到底考えられない。このうち9, 10, 11は、典拠となる文献が新しく、信憑性に欠けるため偽作であることが明白だが、3と6は一般には本人の真作であると信じられているものである。7も成三問の文集には見えず、本人の作とは認めがたい。また4, 5, 8は小説、戯曲における引用であり、おそくとも14世紀以降、中国ではこの詩の特に後半二句が成語化していたことを示

すものである。ともかく8世紀から20世紀にいたるまで、日中韓三国にわたりこれだけの類似の詩が伝わることは、興味深い事実であると言わざるをえない。

(2) 大津皇子と陳後主の詩の比較

これらの詩は陳後主の作を除き、すべて処刑直前の辞世の作、臨刑詩であり、また中国で作者に擬せられた人物はすべて南京となんらかの関連があること、さらに陳後主以外みな筆禍事件により処刑されたことなどの共通点があり、ある特定の条件のもとに伝承されたものであることは確実である。この問題について、一部には最も古い大津皇子の詩が『懐風藻』によって中国に伝わり、それがやや変化して中国、韓国の諸人の作になったとする説もあるが、その当否を解明する鍵は、大津皇子の詩と年代的にもっとも近い陳後主の詩との関係であろう。

陳後主の詩は、奈良時代の僧、智光の『浄名玄論略述』に引く「伝」に出ているが、この「伝」はその文体から見て日本人の筆になると思える。しかしそこで述べられている二つの物語、一つは北周の少帝が楊堅（後の隋文帝）の娘を見初めて皇后とし、その皇后が少帝を暗殺して父の楊堅を帝位に就けるという話、もう一つは陳後主が將軍、妙景の妻に横恋慕して、妙景を戦場に送ってその妻を奪い、妙景は隋に寝返り陳を滅ぼすという話（これに付随して陳後主およびその子の詩が引かれる）は、虚構ではあるものの、中国での伝説が伝わった可能性が高いであろう。後者の陳後主と妙景との話は、正史である『南史・蕭摩訶伝』に見える陳後主が將軍、蕭摩訶の妻と密通したため蕭摩訶が戦意を失ったという記述を連想させ（ただしこの話は『陳書・蕭摩訶伝』には見えない）、この伝説にある程度の根拠があったことを示している。また前半の北周、少帝の話は、平安初期の安澄撰『中論疏記』に引く『淡海記』（淡海三船の撰と言われる）にも見えるが、この『淡海記』には他に『論語』の鄭玄注をはじめ中国の書物が引用されているのである。『浄名玄論略述』の撰者、智光の師である智蔵は留唐僧であり、『懐風藻』に見えるその伝によれば、「呉越の間の高学の尼」について業を受けたという。呉越とはすなわち陳の領土であった地方であり、陳滅亡後の伝説を智蔵が日本に伝え、それが『浄名玄論略述』に記録された可能性があるろう。

このような観点から、もう一度、大津皇子と陳後主の詩を比較してみると、まず叙述の順序と押韻字が異なるほか、金烏 - 日光、泉路 - 黄泉、賓主 - 客主、此

夕 - 今夜など、両方で類義語が使われている点が注目される。このうち陳後主詩の客主は、通常の客と主人の意味ではなく、客をもてなす主人の意味でなければならぬ。そうでなければ「黄泉に客主なし」は意味をなさないからである。客主にそのような用法があることは、『三国志・呂布伝』に「元龍に客主の意なし」ある例からも確かめられる。ところが大津皇子詩の賓主の方は、賓客と主人という意味はあるが、賓客をもてなす主人という意味にはなりにくいと思える。客主は六朝から唐代にかけての詩に用例のない言葉であり、これはだれかが詩語ではない客主をより詩語らしい賓主に改めた結果、破綻を来したものと考えられる。全般的に見ても、大津皇子詩の用語の方がより詩語に近いであろう。すなわち大津皇子と陳後主の詩との関係は、後者の詩に基づいて、だれかが用語をより詩らしいものに変え、さらに叙述の順序をも入れ替えて、別の詩としたと考えるのが合理的である。『萬葉集』巻三に見える大津皇子の辞世の和歌、「ももづたふ磐余の池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲隠りなむ」は、「雲隠れる」が他人の死を指す言葉であることから、後世の偽作であると言われるが、漢詩の方も同じく偽作であると考えられる。一方の陳後主の詩も、もとより本人の作ではないが、陳後主の詩の偽作は、唐の顔真卿撰とされる『隋遺録』など後世の文献に多数見えている。『浄名玄論略述』の詩も、たまたま文献資料は残っていないものの、唐代にすでに存在し、それが一方で日本に伝わって大津皇子の詩となり、もう一方で中国でも五代の江為以下、同じく非業の最後を遂げた人物の詩として二十世紀にいたるまで伝承されたのであろう。なお本発表についての詳細は参考文献に挙げた筆者の二つの論考を参照していただければ幸いである。

参考文献

- 小島憲之 「近江朝前後の文学 その二 大津皇子臨終詩を中心として」『萬葉以前 上代人の表現』（岩波書店 1986）
- 濱正博司 「大津皇子臨終詩と金聖歎・成三問 日中朝の臨刑詩の系譜」『日中朝の比較文学研究』（和泉書店 1989）
- 濱正博司 「大津皇子臨終詩群の解釈」『和漢比較文学叢書』第9巻（汲古書院 1993）
- 金文京 「臨刑詩の系譜 黄泉の宿」『興膳宏教授退官記念中国学論集』（汲古書院 2000）
- 金文京 「大津皇子 臨終一絶 と陳後主 臨行詩」『東方学報』京都 第七三冊（京都大学人文科学研究所 2001）